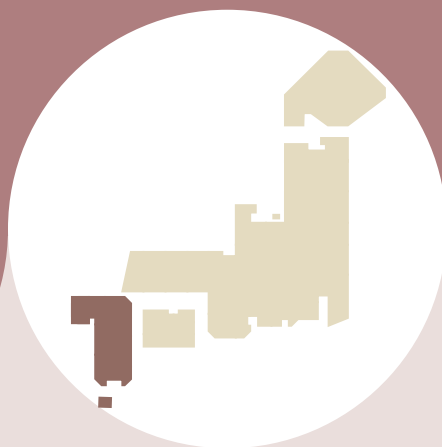


九州 ・ 沖縄



長崎県

松尾良治さん



パークゴルフ

70

熊本県

松本友喜さん



ソフトテニス

71

井上静子さん



ペタンク

72

宮崎県

吉村都代子さん



なぎなた

73

秋本博美さん



将棋

74

沖縄県

島尻勝広さん



将棋

75



パークゴルフ 「長崎県パークゴルフ協会」(選手代表)

まつ お りょう じ

松尾 良 治 さん

66 歳

● 参加歴：2 回目

2年後の大会での上位入賞を誓った和歌山大会

私は、今大会に出場するにあたり3つの目的を持っていました。ほかの種目の長崎県選手と交流すること、他県の方と交流すること、そして上位入賞です。

ねりんピックに参加できる年齢となった高知大会は県予選に出場するも敗退、長崎大会にはボランティアで参加、前々回の秋田大会には運よく出場することができました。そして、2回目の参加となった和歌山大会。初日、長崎から1日ばかりでの和歌山入りでしたが、往路や宿舎で長崎県他種目の選手と交流して、1つ目の目的を達成することができました。

2日目は総合開会式。私のユニフォーム姿を見ていた和歌山県のボランティアの方から「私も長崎県出身です」と声をかけられ、なんと偶然なことに、その方は私の二女の同級生でした。開会式は胸を張って行進し、アトラクションでの「ふるさと愛」に感動の連続でした。宿舎では、K県選手と相部屋となり、パークゴルフ談議に花が咲き、交流を深めることができました。2つ目の他県の方との交流という目的が達成できました。

3日目は公式練習。はじめてのコースを攻略し、思った以上のスコアが出た私は、明日は上位を狙えるかもと青写真を描いてしまいました。

4日目は、朝から予報通りの雨模様。大会中止もありえましたが、会場に到着したときは絶好のコンディションになっていました。スタートこそ順調でしたが、3ホール目に大きな落とし穴があり、痛恨のミスを取り返そうとするあまりに悪循環に陥ってしまいました。その後もスコアは伸びず、終わってみればチームの最下

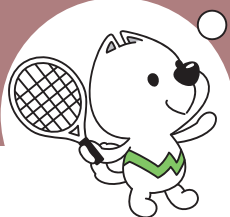
位で、皆をリードするどころか、足を引っ張ってしまう結果となり、3つ目の目的である上位入賞を達成することはできませんでした。

パークゴルフは、今大会21道府県6政令指定都市という参加数が示すように、マイナーなスポーツです。長崎県でも、コースもなく、道具もなく、愛好者もないゼロからのスタートでしたが、今では70名余りの会員数となり、自分も同好会の会長として、各種大会を企画し、三世代間の交流を図るなど普及に努めています。まだまだ知名度が低いパークゴルフですが、健康維持に役立ち、高齢になってからも始められるスポーツであることから、長崎県内でも徐々に競技人口が増えており、選手層の底上げも見込まれます。

2年後の神奈川大会への出場、そこで3つ目の目的を達成することを胸に誓った和歌山大会となりました。



ナイスショット！ ボールの行先を見つめる。



ソフトテニス 「火の国」(監督兼選手)

まつもととも き
松本友喜さん

73 歳

● 参加歴：1 回目

勝利を勝ち取ることの難しさを改めて感じた2日間

令和元年 11 月 8 日（金）、「あふれる情熱 はじける笑顔」がテーマの「ねんりんピック紀の国わかやま 2019」に出場する熊本県選手団は、新幹線で熊本駅から和歌山県へ向け出発し、前泊地の南紀白浜の宿舎では翌日からの大会に備えて英気を養いました。

翌 11 月 9 日（土）、総合開会式が紀三井寺公園陸上競技場で、三笠宮彬子女王のご臨席の下、厳かに行われました。メインアトラクションでは 3500 人の若人が歌手の坂本冬美さんとコラボし、四季折々の歌と踊りで「夢を持ち続けること」の大切さを圧倒的な迫力・構成美で、立冬の紀州の碧空へ向けて歌い上げました。和歌山県民の熱い思いを体現してくれた皆さん、ありがとうございました。

続いて、11 月 10 日（日）、白浜町テニスコートで予選リーグ戦がおこなわれました。試合は混合ダブルス、男子ダブルス、女子ダブルスの順に対戦し、2 点取ったチームが勝ちとなります。熊本県チームは 2011 年熊本大会、2015 年山口大会、2016 年長崎大会と計 3 回優勝しており、今大会は V 4 を目標に、千場・越川ペア（混合）、淋・日根野ペア（男子）、緒方・岸田ペア（女子）の布陣で戦いました。初戦の対山梨県は 3 - 0 で完勝。次の対富山県では混合と男子が勝ち、2 - 1 で勝利。最後の対神戸市戦も 2 - 1 で勝利。1 位グループ決勝トーナメントに進出することになりました。

11 月 11 日（月）、決勝トーナメントの初戦は、地元和歌山県 A チームとベスト 8 をかけて激突しました。1 番手の混合ダブルスは 1 - 4 で惜敗しましたが、2 番手の男子ダブルスは強豪ペアに 4 - 2 で快勝し、3 番手勝負となりました。3 番手の女子ダブルスはファイナルゲームの大接戦となり、ポイントファイブフォー（5 - 4）から逆転され、結果 1 対 2 となり、ベスト 16 で戦いを終えることになりました。残念でありませんが、激しい競い合いの中で、ポイントを、ゲームを、マッチを、チームとしての勝利を勝ち取ることの難しさを、改めてかみしめる 2 日間の戦いとなりました。

最後になりましたが、本大会の運営などに尽力された役員・補助員の方々、鮎の塩焼き、伊勢エビ味噌汁という飛びっきりのおもてなし料理を用意された地元の方々、快適な睡眠、栄養たっぷりの料理などを提供された宿舎の方々、本当にお世話になりました。衷心より御礼申し上げます。



決勝トーナメント前にチームで健闘を誓う。(左から2人目)

ペタンク 「熊本和仁」(監督兼選手)

いのうえしずこ

井上 静子 さん

71 歳

● 参加歴：2 回目



他県の選手たちとの交流も忘れがたいねりんピック

ねりんピック紀の国わかやま 2019、「あふれる情熱 はじける笑顔」のテーマのもと、開催された素晴らしい大会でした。参加した4日間を振り返ってみました。

ねりんピック本大会への出場を決めたのは、5月の熊本県予選での優勝でした。長年参加の機会がなかった私は、「今年こそは、今年こそは」と毎年願っていました。今大会、やっと出場でき、前回出場の石川大会から数えて9年目でした。出場できると決まってからは、メンバー3人と「今年こそは上位を目指して頑張ろう」と練習にも気合が入りました。

11月9日の総合開会式では「鉄砲隊演武」に始まり、いろいろなアトラクションのあと、選手団が入場しました。熊本県選手団は赤いスカーフを振っての入場です。メインアトラクションでは、坂本冬美さんの歌などがあり、全国の皆さんと一緒に盛り上がりを経験することができました。総合開会式も終わり、いよいよ大会会場がある岩出市の市民総合体育館へ移動し、監督会議に続いて開始式です。地元の大宮神社の獅子舞に始まり、和歌山県ペタンク連盟会長から歓迎の挨拶をいただき、その後、最高齢者の表彰、選手宣誓と続き、開始式も無事に終わりました。

その後、宿泊施設の「ホテルいとう」へ移動しました。この日から熊本市の選手と一緒にです。ねりんピック大会前の試合でも一緒でしたので、気心も知れ、行動も一緒にできました。このことも、大会を通しての楽しい出来事のひとつでした。

10日の試合は、青森県A、福井県、神戸市の3チームとの予選です。メンバー3人の気持ちをひとつにし、どうにか1位で決勝トーナメントに出場できました。決勝トーナメントでは1回戦、愛媛県に勝利し、2回戦は予選で当たった福井県と再度の対戦となり、何とか勝利できました。続いて、いよいよベスト4をかけて長野県と対戦しましたが敗戦、今大会での私たちの挑戦は5位で終わりました。大会を通じて、他県の選手たちとふれ合うこともでき、とても良い経験でした。

前回出場した石川大会では、仲間の一人が亡くなり、喪章をつけての参加でした。そのため、全国の方々へ与えた印象も強く、皆さんから温かい応援をいただき、3位という成績を残しました。その縁で、今でも全国の方々との交流が続いています。

この大会を通していろいろな体験、交流ができたことをうれしく思うと共に、いろいろとお世話をしていただいた皆様に感謝いたします。



熊本県ブース前で。子どもたちの幟旗がうれしい。(中央)



なぎなた 「宮崎県」(監督兼選手)

よしむら と よ こ

吉村都代子さん

68歳

● 参加歴：1回目

24年前の宮崎大会と今大会を結びつけた手ぬぐい

ここに2枚の手ぬぐいがある。

1枚は今大会参加記念品。紫地に青のアルファベットで大会名、下に白抜きで「NAGINATA IN KUDOYAMA」とある。自分の持っている手ぬぐいとの違いに驚いた。24年前、宮崎県で開催されたねりんピックの手ぬぐいは白地に紺文字で大会名と連盟名が書かれ、マスコットキャラクター「元気ちゃん」がなぎなたを構えている。96年の大会に競技役員として参加した私は、自分の役割を果たすことで精一杯。しかし、参加者の方々は元気いっぱい、大会を盛り上げてくれた。このような素敵な方々に出会えて良かったと感動した。その記念品がこの手ぬぐいだ。

今回、私は県予選で勝ち、参加の権利を得たが、結局1人での交歓試合(個人戦)参加となった。不安はないかと聞かれたが、今までにお世話になった方々にお会いしたくて、参加を決意した。

それなりに稽古して臨んだ本大会。他競技への参加者との会話、青空の下での総合開会式、バスから見た和歌山県の景色。宿泊は高野山の宿坊で栃木県の方と同室となり、お互いを語り

合った。

開始式では真田出陣太鼓に気持ちが昂ったが、個人戦は2日目。1日目は観戦の合間に、場外イベントに顔を出したり、土産物を選んだり。次の日、1回戦は面識のある福岡県の72歳の方が相手だった。「お互いに楽しみましょうね」とご挨拶した。結果はメンを取って一本勝ち。2回戦は少し年下の埼玉県の方。気負いすぎたか、お互いに打突が決まらず1分間の延長。十分技を出せないうちに判定負け。1人での参加だったが、今までにいろいろな研修会や大会で知り合った方々が応援してくれた。県の担当者も将棋会場とかけ持ちながら、会場にかけつけてくれた。競技時間の5分間は、この大会で競技した証となった。

今大会で83歳で高齢者賞を得た千葉市の方は、24年前の宮崎大会の思い出を語ってくれた。最高齢者賞87歳の福島県の方も宮崎大会に参加、今回も個人戦に参加されていた。2枚の手ぬぐいが年月を超えて、2つの大会を結びつけてくれた。人生の軸としてなぎなたを選んだ私に、たくさんの出会いや思い出ができた。なぎなた競技が再び行われるときに、健康で参加できることを目標に精進していきたい。

大会運営に携わった和歌山県の方々、全日程で支えてくださった宮崎県の方々に御礼申し上げます。24年前、大会運営の隅っこにいた私が、競技者として参加できた喜びをお伝えします。ありがとうございました。



子どもたちの応援を背に健闘を誓う。



24年前の手ぬぐい(上)と今大会の手ぬぐい(下)。

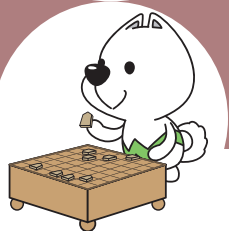
将棋 「南国スピリッツ」(選手代表)

あきもとひろみ

秋本博美さん

68歳

● 参加歴：1回目



升田幸三と大山康晴の因縁の地・高野山で真剣勝負

ねんりんピック初日、紀三井寺公園陸上競技場での豪華絢爛、盛大な総合開会式を終え、2日目は将棋種目の開催場である高野山にコマを進めた。

つづら折りした山道を約1時間半、マイクロバスに揺られて到着した高野山は、さすがに肌を刺すような冷気に満ちあふれ、身の引き締まる思いがした。いや、ただの冷気ではなく、歴史ある高野山が持ちあわせている「霊気」であったかもしれない。

高野山大学での選手歓迎オープニングでは91歳の最高齢選手が紹介され、全国からの選手たちの間をしっかりと足取りで通り抜けると、壇上に上がり、高野町長から表彰を受けた。場内から万雷の拍手を受けながら誇らしげに挨拶をされる姿を見て、ふと、「無事これ名馬」という言葉が脳裏をかすめた。

続く、高野町長の選手歓迎の言葉がふるっていた。ねんりんピックが和歌山県で開催されると聞いた町長は、「ぜひ、将棋はわが高野山で開催してほしい」といち早く県に申し出をしたそうである。

理由は今から約70年前の昭和23年。第7期名人戦挑戦権決定三番勝負を共に1勝1敗で迎え、第3局目をこの高野山で戦った升田幸三と大山康晴にある。将棋史上に残る大逆転劇を演じた「高野山の決戦」だ。升田があと1手で勝ちだったのに、最後の最後に悪手を指してしまい、大山に逆転負けを喫し、名人挑戦権を失ってしまった因縁の対局である。後に、升田は朝日新聞社のインタビューにこたえ、自分への戒めを込めて「錯覚いけない、よく見るよろし」という有名な言葉を残したものである。

会場のスタッフは皆、「錯覚いけない、よく見るよろし」の文字が印刷されたユニフォームを着用していた。

将棋大会は高野山大学にほど近い高野山大師教会で開催され、演壇の上の垂れ幕には「将棋交流大会」と銘打ってあるものの、試合が始まると「交流」気分だけではいられない真剣勝負そのものだ。

ねんりんピックはやはり「競技」なのである。

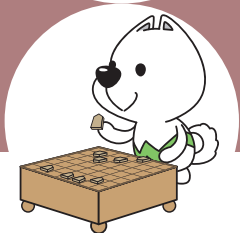
3泊4日、大会としては長期であったが、少しもそうは感じさせなかったのは県の担当スタッフの事前の緻密な下調べ、打ち合わせの賜物である。すべてがスムーズ、そして、快適な旅でもあった。



気持ちを集中、交流大会でも対局は真剣勝負。(左側)



試合前にチームメイトの松浦選手と。(左側)



将棋 「ちゅら島ウチナー」(選手)

しまじりかつひろ

島尻勝広さん

60 歳

● 参加歴：1 回目

宿坊に宿泊し、仲間と交流。貴重な機会に感謝

今回、縁あってねんりんピックの将棋交流大会に参加することになりました。実は、沖縄県からの参加者は前年の県内大会などを通して3人決まっていたのですが、参加予定者の1人が大会の行程に体力的な懸念を抱き、急遽参加を見送ることになりました。そのため、新たに参加者の呼びかけが行われ、棋力とは関係なく、私が追加で参加することになりました。近年、将棋界は藤井聡太7段の出現でブームになっており、県内においても小学生を含めて底辺に広がりを感じているところです。

さて、はじめての将棋交流大会への参加でしたが、初日の懇親会では沖縄県選手団の競技を超えた交流があり、選手が競技にいきいきと取り組んでいることに感動しました。人生100年時代が叫ばれている中で、いかに心身共に健康で過ごすことができるかが重要であります。それを実践しているのが、「ねんりんピック」の愛称で親しまれる「全国健康福祉祭」です。総合開会式は、和歌山市の紀三井寺公園陸上競技場で皇族の御臨席の下、厳粛な雰囲気で開催され、選手団入場行進や炬火入場・点火、メインアトラクションなど、当事者として参加できることに感謝の念を抱きました。

将棋交流大会は高野山大師教会で開催され、

64チーム(190名)が参加しました。沖縄県は「ちゅら島ウチナー」のチーム名で参加し、和歌山県、山口県、新潟市の4チームと予選リーグを戦いましたが、残念ながら予選突破することはできませんでした。

高野山は平成16年7月に世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の一部として登録されており、大門から壇上伽藍、金剛峯寺、奥の院などに年間約140万人の観光客が訪れ、国際観光地として脚光を浴びています。

また、高野山には52の宿坊寺院があり、今回、安養院が宿泊場所となりました。精進料理を食べ、早朝、本堂で行われる「朝のお勤め」で心をいやすことができました。

私は急遽、将棋交流大会に参加しましたが、チームメンバーの上原氏、西原氏と3人で4泊とも同じ部屋で宿泊し、将棋談議などで盛り上がり、貴重な体験をさせていただきました。また、事務局の役員が交通不便な高野山にわざわざ車で激励に来てくださり、感謝でいっぱいでした。

今後とも、多くの方がねんりんピック大会へ積極的に参加し、スポーツや文化など多彩なイベントを通して、地域や世代を超えた交流の輪が広がること、また健康長寿沖縄県が復活することを期待しています。